

水族館の展示を見て

土木研究所 水循環研究グループ 河川生態チーム 尾澤卓思

このごろ水族館へ行くと、いつも感心させられる。大きな水槽が横から、上から、下からとみることができたり、トンネルの側面から天井が水槽になっていたり、水槽が円筒形で全面から見ることができたりと見る者の好奇心をくすぐるような設計がなされている。また、水槽内にカメラを設置し、移動したり、ズームで拡大したりと楽しむことができる。さらには、浅い水槽に手を入れて生き物を直接触ることもできたり、パソコンによるクイズやビデオによる説明、顕微鏡でミクロな生き物を見たりなど、工夫がたくさんなされている。我々が子供の頃の水族館は、プールのような水槽と窓のような水槽が壁に並んでいた。説明もパネルによるシンプルなものが多かったように思う。その頃は、それで十分満足していたが、現在の展示技術と比較すると相当の違いがある。様々な分野の技術の進歩とその普及により我々の生活や社会も変わり、こうした水族館の展示も変わってきたのだ。

また、水族館の展示の企画も変わってきたような気がする。昔は、珍しい種や様々な種を図鑑のように見ることが中心であったが、現在は、多分に生息環境や生物の相互関係を意識しているように思われる。少しでも自然の仕組みを表現し、環境を見せてくれているように思う。

しかし、水族館の展示でいつも気になることがある。当然のことなのだが、見せることを優先するため、魚の密度を大きくしたり、無理な生息環境で飼育したりしている。凝縮した見せ方は、見る者にわかりやすいが、魚は相当のストレスを受けているのであろう。少しかわいそうな気がする。

見せるということは、ありのままというより特徴を際立たせ、如何に見る者に意図をわかりやすく伝える、また見る者の気持ちを動かし、その気にさせるということが重要なことが多い。そのための工夫は、今後とも技術の進歩とともにどのように変化していくか楽しみである。様々な観点から、バランスのよい展示を期待する。



デンマークのシルケボーにある水族館「アクア」の館内風景。

特集の内容についてさらに身近に体験してもらえるように、関連施設の展示を紹介します。

展示見聞録

実河川の水中の様子を目線の高さで実感できる！

紫江 S 水環境館

「河川観察窓」

治水対策と水辺を活かした街づくりを目的に北九州市が行う「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」の一環として昨年オープンした「紫江 S 水環境館」を訪問しました。

紫川に隣接するこの施設は、護岸内に幅7.2m x 高さ2.3mのアクリル製の河川観察窓を取り付けた箱形護岸構造物として築造されています。窓越しに川を見るこのアイデアは、たくさんの市民から寄せられた提案の中から、中学生のアイデアが採用されて実現したものです。

観察窓に近寄ると対岸の景色とともに、川の中の様子を普段見ることができない視点から間近に観察できます。スズキ、クロダイ、マハゼ、モクズガニ等、紫川の汽水域の豊かな生物の自然な姿を見ることができます。

また、この施設は河口に近いので、常に水位が変動し、時間帯によっては海水の遡上によって生じる塩水くさびの塩水層と、河川水の淡水層との境界面「淡塩境界面」を肉眼で確認することもできます。

自然のままの透明度のため、水の濁りもそのままに映し出されます。時には流されてくるゴミが見えることもあり、私たちが普段、川に影響を与えながら生活していることを改めて考えさせられます。まさに生活に切り離せない川の現状を身近に実感できる展示だといえるでしょう。

展示スペースを奥へ進むと、観察窓に現れる魚をはじめ紫川などの魚類を紹介する「北九州市の河川にすむ魚たち」の

飼育展示のコーナーがあります。この展示に関する魚類の採捕、飼育管理は、学校ビオトープづくり、希少種の繁殖などで注目を集めている福岡県立北九州高等学校の課外クラブ「魚部」の協力で行われています。

北九州市建設局下水道河川部水環境課の山川幸江さんにお聞きすると、「特に部員が作成する解説文は、魚類の名称や生態に関する解説だけでなく、魚の特徴についての感想なども自筆で記されているので来館者に好評。」とのこと。今後さらに連携した取り組みを積極的に進めていくそうです。

小倉駅からのアクセスも良い水環境館。観察窓に映し出される様々な川の表情を、季節や天候、時間を変えて何度も観察しに行ってみましょう。

[吉富友恭(土木研究所 水循環研究グループ 河川生態チーム)]



間近に実河川を観察できる「河川観察窓」。



紫川に隣接する紫江 S 水環境館の外観。



北九州高校の協力で飼育展示が行われている。